豊岡市出石伝統的建造物群保存地区ニュース

第24号

出石城下町 伝建かわら版

平成22年1月10日発行（6P）編集／豊岡市教育委員会（文化振興課：TEL0796-23-1160、出石分室：TEL0796-21-9029）

第2回 修理修景基準細則検討会 開催

現地調査で出石の町並みの特徴を明らかに！

11月28日、「第2回 修理修景基準細則検討会」を開催しました。今回は、伝統的建造物のさまざまな特徴を現地で計測して調査するとともに、出石支所会議室でグループ別に分かれて修理修景基準（補助金交付基準）のあり方について協議しました。

間口、高さ、格子幅、下屋根、基礎・・・進む調査！

参加者は、伝建地区内の住民（保存会役員）を始め、出石まちなみ設計士会会員、保存会登録建築業者の方々のほか、専門的な見地からの意見が求められることから、瓦業者、建具業者、左官業者の方々にも参加いただきました。

現地調査では、伝統的建造物の特徴的な意匠（デザイン）を調べ、計測・記録しました。

その後のグループ協議では伝統的建造物の特徴を洗い出し、「２階が真壁（柱が見える壁）なのが特徴的だな」といった意見や、「２階の階高の低さが歴史的町並みの雰囲気を出しているんだな」といった意見など、さまざまな意見が出されました。

第３回は、平成２２年１月２１日に開催し、修理修景基準の細則を検討する予定です。（全４回です。）

第１回修理修景基準細則検討会　大場先生講演

「出石城下町の町家の特徴と修景」

１１月６日に開催しました第１回修理修景基準細則検討会では、大場修先生（京都府立大学教授）に「出石城下町の町家の特徴と修景」と題して講演を行っていただきました。

その講演の一部を掲載いたします。（当日は70枚ほどのスライドがありましたが、紙面の都合上、講演内容もスライドも相当割愛することご容赦ください！）

出石城下町の町家の特徴を説明される大場先生と熱心に聴き入る参加者

全国の伝建地区の中でも貴重な「城下町」

現在 86 箇所の重要伝建地区がありますが、この中で町並みの種別が「城下町」として名前が挙がっているのは３ヶ所だけです。出石と篠山と九州の秋月だけです。

商家町や武家町といったように、城下町の一部が伝建地区になっているところはあるのですが、出石のように城郭とその城下町のほとんどの範囲が伝建地区になっているという地域は意外に少ない。

出石は城下町のほぼ全範囲を網羅するような形で選定されていますので、町のほとんど全体が文化財としての価値を持っていることになります。そういう点で、全国 86 箇所のなかでも「城下町」としての条件をほぼ満たした地域として非常に貴重だと私は思っています。

城下町絵図と現在の比較 ～変わらない道幅、変わる水路・お寺の位置～

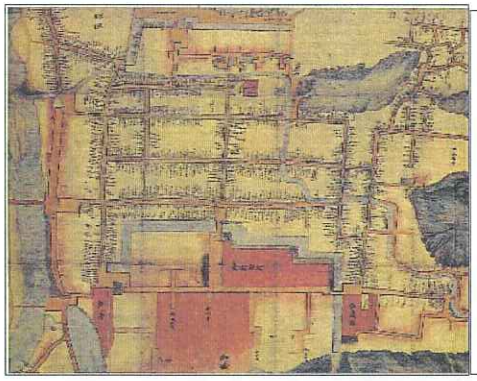
出石の町並みにおいて、城下町としての伝統、歴史性を考える上で基本になるのは、文化７年（1810 年）の出石城下町絵図です。

この道の形などは現状とほとんど変わってない。道幅もほとんど変化がない。江戸時代から道幅が変わっていないということは、なかなか珍しい。この絵図の姿が現在の町とほとんど正確にオーバーラップさせることができるのです。

ということは、出石は城下町としての骨格が、現在もきちっと残っていると言え、そのことが評価の一つのポイントになります。

逆に、外堀や内堀は現状と比較し、かなり変わっています。それから、お寺の配置もかなり違うということもわかります。

とはいえ、この城下町は近代を経て現代があるわけですから、こういった変化も含めて城下町としての歴史として評価をしていくべきだろうと考えています。



文化七年の出石城下町絵図。現在の道幅は江戸時代から変わらないことがわかります。

江戸時代から継承される宅地割りと狭い間口

やはり出石の町並みの町家の最大の特徴は宅地割だと思いますね。

城下町絵図と現在の宅地割りを比較した図。黒塗り部分が江戸時代の宅地割りのまま。道に水路があったこともわかります。

文化７年の絵図と現在の宅地割りを比較すると、全体として約４割、特に八木町の西、田結庄の辺りでは６割を超える宅地が江戸時代の宅地割りを現在も残しているということがわかります。出

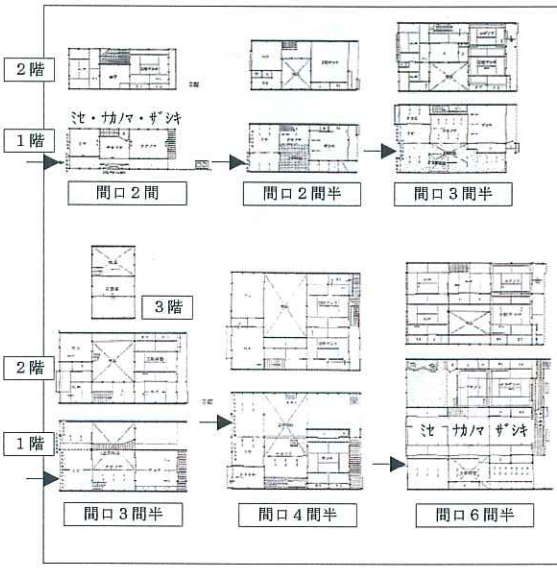
石では宅地割りの歴史性は非常に特筆すべき点だと思っています。

しかも一軒一軒の間口が大変狭い。

一軒一軒の間口を全部測ってみました。そうしますと、間口が２間から３間ぐらいが平均値だとわかりました。これが出石の町家の標準的な規模なのだということなのです。全国的にみても大変狭く、このことが出石城下町の町並みの特徴と言えます。私は西日本では一番狭いだろうと思っています。

内部の特徴１　～三間取り型の構成、吹き抜け、２階本座敷～

町家をどのように修理、修景していくかということで外観に関心があると思いますが、やはり外観というのは内部の結果が外に現れた姿ですから、きちんと内部まで含めてご理解いただきたいと思います。



間口幅の大小に関わらず、通り土間があり、表から「ミセ」、「ナカノマ」、「ザシキ」の三間取り型（みまどりがた）の構成になっています。

間口幅に関係なく、通り土間があって、土間に面して部屋が縦に３室並び、中央の「ナカノマ」上手に階段が設けられています。これが、出石で共通する町家１階部分の基本的な型です。

一方、２階は、土間に面して大きな吹き抜け（図の×部分）があります。吹き抜けを取り囲むようにして部屋が前後に配置されています。裏に比較的大きな「ザシキ」をとります。一階は通り土間がありますので、あまり大きな部屋が取れないですね。ですから２階に本座敷、主座敷を設けることになります。

間口３間半以上になると「ミセ」を２つに分けたりします。「ミセ」を２つに分けるということが外観に現れてきますので、この点はご記憶いただきたい点です。

内部の特徴２　～外に張り出した「お勝手」と現代の「ダイニングキッチン」～

それから、出石の町家の特徴としまして、お勝手、つまり台所機能が母屋の外に張り出して設置されています。このことが出石の町家の水周りの構成の基本的な特徴になります。

このような構成でしたから、現代の台所（ダイニングキッチン）を「ザシキ」の裏に増築している（表から４室目になる）お宅が大変多いことに気がつきました。

本来は、この奥の間（「ザシキ」）は縁側があって庭を眺めて楽しむお座敷です。

しかし、そこにダイニングキッチンが配置されることで内部が暗くなります。また庭を楽しむ魅力をなくしてしまっているのです。工夫が必要なところです。

出石の町家の魅力１　～お座敷からの庭の眺め～

やはり私は、出石の町家の魅力は裏のお座敷に座ってお庭を眺めることではないかと思いますね。特に２階のお座敷からの眺めは最高ですね。本当に素晴らしいといつも思います。

１階のお座敷に対して２階のお座敷を書院造としてきっちり造り、より格式の高い本座敷に仕上げているところが多い。

こういう景色は、やはり外からはわからない出石の町家の魅力だろうと思います。

裏のお座敷から眺める庭の景色。外からはわからない、出石の町家の大きな魅力ですね。

出石の町家の魅力２　～吹き抜け、タカによる大空間～

このお宅は特に吹き抜けの構成が複雑になっ